

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
分担研究報告書

家族・遺族の精神心理的負担のリスク要因の同定とスクリーニング方法の確立  
に関する研究

研究分担者 宮下 光令 東北大学大学院医学系研究科

研究要旨：がん患者の家族にとって死別はうつ病や自殺の重要なリスクでもあることから、欧米では、家族・遺族ケアが積極的に推進されてきた。しかし、わが国におけるうつ病や複雑性悲嘆の有病率、希死念慮の割合やそのリスク要因に関する研究はあまり多くない。そこで、本研究では日本の過去の大規模遺族調査のデータ等进行分析することにより

(1) 遺族の希死念慮の割合とリスク要因の同定、(2) 遺族のうつ・複雑性悲嘆の割合とリスク要因の同定と予測可能性の検討、を行った。

A. 研究目的

(1) 遺族の希死念慮の割合とリスク要因の同定、  
(2) 遺族のうつ・複雑性悲嘆の割合とリスク要因の同定と予測可能性の検討、を行うこと。

B. 研究方法

研究分担者(宮下)が実施したがん患者対象の多施設遺族調査(J-HOPE研究：[https://www.hospat.org/practice\\_substance-top.html](https://www.hospat.org/practice_substance-top.html))のデータを用いて解析した。

C. 研究結果

計17,237名のデータを解析対象とした。(1)は、がん患者遺族の希死念慮をもつ割合は11%だった(うつハイリスク者では42%)。リスク要因として「死別に対する心の準備の不十分さ」、「うつの既往」などがあげられた。(2)は、対象遺族のうつ、複雑性悲嘆の推定割合はそれぞれ15%と12%だった。特に医療者が臨床で簡便にスクリーニング可能である変数とモデルの適合度を総合的に検討し、モデル2(医療者が評価可能な変数投入：死亡場所、患者/遺族年齢、続柄、介護中のからだ/こころの健康、精神科受診、付添頻度、心の準備)について、スコアリングモデルを作成し、うつ・複雑性悲嘆ともに、感度70-80%、特異度50-60%程度のモデルを開発した。

D. 考察

わが国のがん患者遺族のうつ・複雑性悲嘆・希死念慮の推定割合は海外の先行研究と同等ではあるものの、決して低い割合とはいえない。本研究結果から、ハイリスク者を早期に同定し、ケアに繋げることが望まれる。

E. 結論

既存の遺族調査のデータによって研究目的(1)(2)は明らかになった。今後は縦断的デザインによる検証が望まれる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Aoyama M, Miyashita M, Masukawa K, Morita T, Kizawa Y, Tsuneto S, Shima Y, Akechi T. Predicting Models of Depression or Complicated Grief Among Bereaved Family Members of Patients with Cancer. *Psycho Oncology*. 2021;30(7):1151-59.

2. 学会発表

1. 青山真帆, 宮下光令, 升川研人, 森田達也, 木澤義之, 恒藤暁, 志真泰夫, 明智龍男. がん患者遺族の希死念慮と関連要因. 第26回日本緩和医療学会学術大会, 2021 June18-19, 横浜(Webとのハイブリッド開催).

2. 青山真帆, 宮下光令, 升川研人, 森田達也, 木澤義之, 恒藤暁, 志真泰夫, 明智龍男. がん患者遺族のうつ・複雑性悲嘆の予測モデルの開発. 第 26 回日本緩和医療学会学術大会, 2021 June18-19, 横浜 (Web とのハイブリッド開催).

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得  
該当なし
2. 実用新案登録  
該当なし
3. その他  
該当なし